

## 初年次教育の未来 ―一定着と応用可能性―

山本啓一  
北陸大学

今年度、9月5日・6日に開催された第11回本学会大会は、台風と北海道胆振東部地震のため、多くのプログラムが中止となった。大会開催の準備を進めてこられた酪農学園大学の実行委員の教職員各位のご苦勞・ご心痛は察するに余りある。

当日、筆者は大会企画シンポジウムの講演者であった日向野幹也教授(早稲田大学)とともに、地震後の札幌でホテルを探す一日を過ごした。

日向野教授は、2006年から立教大学経営学部の初年次必修科目を統括担当し、アクティブ・ラーニングやPBL等の手法を導入したリーダーシップ・プログラムを開発された。講演では、「初年次教育という概念も知らず、アクティブラーニングやPBLという概念も知らず、リーダーシップ教育に必要なものをすべて使っただけだ」とも語られていた。

日向野教授だけでなく、2000年前後に急激に進行した“大学のユニバーサル化”という大きな課題の中で、様々な教育改善を試行錯誤していくうちに、知らず知らず初年次教育に接近していった大学関係者たちも多くいたことであろう。そのような先駆的实践者たちが、現在の初年次教育および本学会の大きな支柱となっていることは言うまでもない。

さて、文科省の調査によれば、初年次教育は全体の97%である721大学で導入されているという。

この10年間で、日本の大学において初年次教育はほぼ定着したといえる。他方、初年次教育学会の設立趣意書には、「初年次教育のもつ重要性を日本の高等教育界に定着させていく」とある。それでは、初年次教育学会の使命は達成されたと言ってよいのだろうか。

もちろんそうではない。筆者は、本学会を通じて蓄積されてきた初年次教育の知見は、今後、初年次教育“以外”の分野で、高い付加価値を持つようになると思う。

第1に、専門教育への拡大である。従来、初年次教育と専門教育との断層が指摘されてきた。だが、その大きな理由は、教育内容よりも、カリキュラムと実施体制にあったのではないだろうか。今後、多くの大学で、教学マネジメント体制が確立するにつれ、新たな2年次プログラムが登場する可能性が広がるだろう。

第2に、高大接続と入試改革である。初年次教育プログラムは、当然ながら、入試プログラムや高校の探究型学習等に応用されていくだろう。

第3に、リカレント教育である。筆者は現在、高校教員を対象とする研修を開発し、自学部で実施している。この研修は、これまで筆者が初年次教育として開発してきたジェネリック・スキル育成プログラムが根底にある。初年次教育の延長線上には、リカレント教育や企業研修の可能性が広がっているのではないだろうか。

今後も、初年次教育学会は、未来の教育のインキュベーション・センターとなるべく、より一層、学術的かつ実践的知見を蓄積しつづけていく必要があると考える。

(初年次教育学会理事)